



森を再生する会会報

平成17年12月12日
2005, Dec., 12

目次: 秋の植樹祭 1
神谷学安城市長 祝辞

特定非営利活動法人・森を再生する会

秋の植樹祭 段戸山に240人が1400本の苗木を植えました

皆様に感謝

NPO森を再生する会

理事長 神谷輝幸

ふだんは静かな山間に今年も240名ほどの人々が植樹に訪れた。設楽町西川地区NPO森を再生する会のフィールド「水源の森」にブナ・ミズナラなど土地本来の木13種類、1,410本を植えて意義のある植樹祭を終えることが出来た。

今年の特色を3つあげてみよう。

まずは、植生学、生態学で著名な横浜国立大学大学院教授藤原一繪先生が2日間参加していただいたことだ。先生は国際的にもご活躍で、この2日間を挟んで東南アジア、アメリカへ学術研究に飛び回られ、多忙を極めておられる。

10月22日(土)、藤原一繪先生と段戸裏谷原生林を散策する。ここは愛知県内最大級のブナ原生林で学術的にも貴重な森。

「森が語りかけてくれることに耳を傾けましょう！森が教えてくれますよ。」と藤原一繪先生は参加者に話しかけられ、目に触れる一つ一つの草木の名前と特色を説明される。

目で見て、匂いをかぎ、肌に触れ、なめて植物を知ること、まさに現場で示される。「コケの生えているところは土壌に栄養分のないことを教えてください。」「これはコミネカエデ、これはミズナラ…。こうした樹木を見るとブナを見なくとも、ここはブナ



植樹祭 開会式(中央 藤原一繪横近国)



林であることが分かります。ここはブナが主になる森ですが、その周りにはたくさんのお木々が助け合って(共生して)います。森はファミリーで形成されて

藤原先生プロ
フィール 2

安城南ライオン
ズクラブ 鈴木
政次会長 2

ヘリコプターから 3

ボーイスカウトの
声 3

参加者の声
エコクラブ 安城
学園高校 4

植樹祭を準備し
て 5

1万人の森作り
斎藤和彦 6

イオン助成金
交付決定 6

原稿募集
私の夢 6

神谷学安城市長 祝辞

本日、段戸の地で水源の森づくり植樹に参加されました皆さんに中流域の安城市から激励のメッセージをお送りいたします。

安城市は明治用水のお陰で、かつては、日本のデンマークと呼ばれるほど農業を基盤として発展してまいりました。現代では、農業のみならず、工業、商業そして市民の生活も水なくては成立しません。そして、今後一層水の重要性がクローズアップされる時代となります。水は命です。

そのためには、都市から遠く離れた山間部の荒れた山を「水源の森」として「命の森」に代えていかねればなりません。NPO森を再生する会では、市民が主役となりこの運動に取り組んでおられることに敬意を表するものであります。安城市におきましては、市民が主役としての街づくりを進めており、こうした市民の活動を支援してまいります。この意義ある活動が相互の協力関係の中で、今後ますます充実・発展し、未来の世代への大いなる「いのちの遺産」となることをご期待申し上げます。



植樹をされる神谷学安城市長

皆様に感謝(1ページから続く)

ており、ブナだけでは森は減んでいきます。」成る程、参加者皆感動。

10月23日(日)、昨年植樹した場所を見ていただく。「よくここまでやられましたね。平均年齢はいくつですか?」「60歳くらいです。一番元気な人は70歳です。」高齢社会を嘆いていないで、潜在能力がある高齢者が活躍できる場があれば日本は大丈夫という意見で一致した。藤原一繪先生の指導のもと老若男女、県内・県外各地から参加した人たちが瞬間に1,410本は植えられた。藤原先生の参加で質の高い植樹祭となった。第2の特筆すべきことは、安城南ライオンズクラブのご支援が得られたことである。

当日は、安城市から神谷学市長、杉山隆俊議長が同クラブ会員所有のヘリコプターで到着。スギの間伐材で焼いた炭300キログラムを上空からヘリで散布し、地球温暖化防止を呼びかけた。「流域は一つ、運命共同体」のスローガンが実現に向けて動いた瞬間でもある。

第3の特筆すべきことは、ボランティアの心意気。自然への関心、奉仕の精神、人とのふれあい、さまざまな思いをもって集まった240名の人たち。その心意気とそれぞれの持ち味を生かして「頑張らず、欲張らず、威張らず、自分のペースで」協力していただいたことが成功への元であり、長続きする秘訣であると感ずる。

ご参加いただいた皆さんに心から厚くお礼申し上げます。

藤原 一繪先生 プロフィール

横浜国立大学教授、大学院環境情報研究院植生学研究室、理学博士、国際植生学会副会長(2003-2006) 国際生態学会評議員(2000-20005)。

(藤原研究室ホームページより一部抜粋<http://kazu1.kan.ynu.ac.jp/gaiyou.html>)

藤原研究室では、緑環境を構成する植物の集団-植生の構成、動態、分布、環境要因などの基礎研究を行っています。これらの基礎データを基盤にして現存植生図による環境診断・変化を解析し、地域の植生の戸籍簿をつくと同時に、診断のもとに、防災、生物多様性維持・回復、自然林から景観創造までの植生回復理論確立・実験を行っています。



私たちのクラブアクティビティ 安城南ライオンズクラブ会長 鈴木政次

この度、NPO森を再生する会主催の段戸山植樹祭に参加させていただきましてまことに有難うございました。

私がこの会を知ったのは約1年前のことです。炭焼き塾の神谷輝幸先生にお会いした中で感動の言葉と出会いました。その言葉とは「お金という遺産を残すより、命という遺産を残したい。あなたの命を将来の命につなげるために」の一言でした。何とかお役に立ちたいとの思いで皆に呼びかけたところ多くの賛同者も集まってくれました。幸いにもクラブアクティビティ(奉仕活動)として支援金を贈ることができ、又、段戸山植樹祭にもクラブ員の皆様11名と参加させていただき、ボランティア活動ができ、とても充実した一日を過ごすことができました。感謝致しております。

神谷先生がこの活動をより多くの人々に広げられ、環境問題の改善の輪が大輪に育って次世代に人々が豊かに平和に暮らせるようになりますことを心から願いつつ、クラブ員一同心よりエールをお送りいたします。



眼下に眺めたふる里の森

段戸山の入り口付近に住む私は、この山に慣れ親しんで子供のころより何回となく登ってきた。しかし、最近は住む人の数も減って、特に段戸国有林が財政難のいうことから極度に働く人々を減らしてきたためすっかり山はさびしく荒れが目立つようになってきた。

ふる里を守るには山づくりしかない。そんな会の方針でこつこつと荒れた山をみんなで手入れして広葉樹の苗木を植えつけてきた所、「森を再生する会」のみなさんと合同で森づくりを進めようということになって毎回参加している。

今年は久しぶりにヘリをとばして杉の間伐材で焼き上げた炭を山に撒こうという企画が進んで「地形をよく知っているから」とヘリから炭を撒く手伝いをするようになった。

眼下にふる里の山をはじめ眺めた。遠くに富士山が見え、杉の針葉樹一色に覆われた山だったが川沿いや人家の側に残る広葉樹類が色づいて美しかった。



山に炭を撒くヘリコプター(南安城ライオンズクラブ支援)

「きっとふる里の森は蘇る」
輝く太陽に照らされながら、わたしのこころは震えた。

私たちの森を守ろう 碧南第2団ボーイスカウト隊

ボーイスカウトの指導者をしています。夏休みには斉藤さんのご厚意で3泊4日間のキャンプをこの西川でさせて頂いています。手付かずの自然が残る西川は、とても貴重な体験を子供達と私達と与えてくれます。昨年に続き『紅葉の植樹祭』に参加できまして、とても感謝しています。木の名前や葉の形を覚え(?)穴を掘り植樹が出来ました。

私たちは、自然から奪うことばかりです。何か少しでも、自然にお返しが出来たらと思います。子供達が大きく成って、大きく育った木を次の子供達に自慢する姿を思い浮かべながら、川の水の冷たさや空気のおいしさを感じつつ、森や自然の大切さを子供達に伝えて行きたいと思っています。



植樹する碧南第2団ボーイスカウト

秋の植樹祭に参加して 西尾 謙三

秋になり、涼しさから寒さへ変わろうとしている季節となりました。

私は安城准看護学校の生徒で、事務長であり今回の森を再生する会の理事長と、担任の先生に紹介され友人の留美(?)・楓蘭(8)・実優(8)・清楓(6)・夢叶(4)・丈太郎(3)と参加しました。

山に着くと、川が流れ、空気の良さが伝わってきました。実際に植樹した際、穴を掘り、隣にある木と近くにならないよう間隔を開け苗木を植え、葉っぱを入れると木が腐ってしまう為入れないように土を被せ、その上に葉っぱを被せ、ネームカードに自分の名前を書き木の生長を妨げないように枝に掛け、しっかり生長しますようにと願いを込め木の名前を3回呼びました。自然が減りつつある中で、自然と人との交流をもち子供達は川で遊んでお腹を空かせご飯をいつも以上に食べていました。はしゃぎ回りすぎた為に大根畑に落ちてしまうというハプニングもありましたが、自然の大切さ、木を植えることの意味を考えさせられる1日でした。



子ども達と一緒に植林に参加

植樹祭に参加して

安城学園高校・エコ・ボランティア部部長・3年 石川 優子

私は、安城学園高校のエコ・ボランティア部員として植樹に参加するのは今回で7回目です。その時々で山の様子や作業内容は違いますが、いつも変わらないのが山の空気が美味しいことと、作業を終えた後の爽快感です。春の山は山つつじがきれいに咲き山菜摘みもしました。夏の間伐作業では終わったあと、川で水遊びをし、秋は色づいた山でどんぐりを探しました。また、竹を使って息を吹いて火をおこしたり、柿の皮をむいて食べたことも私にとって始めての山での体験でした。

今回は植樹祭ということで、炭をヘリコプターから散布するなど大掛かりです。参加者もいつもとは比べられない大人数で、お祭りの様ににぎやかでした。碧南のボーイスカウトの小、中学生がテ

キパキと指示通り次々と植えていく中、初めて参加した私たちの部員は、急な斜面と足場の狭さに思うように動けずおろおろしていました。でも「勉強より面白い」と汗と土まみれになりながら、何種類もの苗木を斜面に丁寧に植え、自分の名前の名札を植樹したばかりの木に付けるなど、笑顔で山の一日を楽しみました。私も以前植えた木が大きくなっているのを確認することが毎回の楽しみです。美しい自然をいつまでも守るためにも植樹に今後も参加したいと思っています。

植じゅさいのたいけん 西尾小学校1年 尾崎 公祐

ぼくは、はじめての植じゅさいに行きました。いっしょ行ったのは、ぼくとパパと、妹の加奈とかかっている犬のマルチーズ フーの3人と1ぴきで行きました。運転しゃは、パパで目てきはだんと山だ。

ぼくたち三人は、だんと山は初めてなので、だれも道はわからない。ぼくたちは、カーナビをたよりに進んでいった。とちゅうでみちがけわしくなった。ぼくはフーをひぎにのせていた。とちゅうでケロケロと音がした。ぼくは下を見た。するとフーが車よいをしてもどしてしまった。ぼくはパパに言い、車をとめた。パパはよいをとめるためにフーを外に出してやった。少し行くと次は加奈がよった。車を止め加奈は外に出てすこしあるいてまたしゅぱつした。ちよっとまよったけれどなんとかついた。ぼくはそこににもつをおいて、木を植える所に行きました。

そこではもう、かいかいしきがはじまっていた。そこはアスレチックみたいですごかった。水がたまっていたのですごく寒かった。植えるのがはじまると、ぼくは火の横をとおって、フーをおじいちゃんにまかせて上にのぼっていった。いくら上に行っても木もみんな植えてあったので横に行った。やっとあいているところを見つけたので植えた。ぼくは、パパと木を5本ほど植えてから加奈と下におりた。

にもつをおいてあるところにもどると、ちゃんこ汁をやっていた。ぼくはおいしかったので2はい食べた。フーも口が渴いていたので川の水



フーとパパと加奈ちゃんとぼく

をあげた。さいごにだれかのコンサートを川のちかくで聞いて帰った。帰りは、わき水が出ていたところがあったので水とりにくんで帰った。その清水はふつうの水よりすこしかたかった。ぼくは植じゅさいですごくきょうなけいけんをしたのでよかったです。

子どもたちと森の散策に参加して 深井 美貴

NPO会員の方に誘われて、横浜国立大学教授の藤原先生と段戸原生林を散策するという会に、3人の子どもを連れて参加しました。翌日の植林の方は、残念ながら子どもの学校の用事で参加できませんでした。当日は少し小雨のばらつく天候でしたが、子どもたちは、とても喜んでいました。以下は長女の感想です。

「NPOのことは教科書に名前が載っていて知っていましたが、はじめはどんなことをするのかなって、心配していました。けれど、一緒に歩いた方が『この葉っぱいい香りがするから匂いをかいでごらん。』『ほら、笹舟作ってあげたから上げるよ。』とやさしい言葉をかけてくださり、藤原先生がとても細かく説明してくださるなど、寒さを忘れてしまうほどいろいろな発見がありました。中でもマムシ草という植物があったこと、サロメチールの匂いのする木があったことが、一番の発見でした、春になるといろいろの花が咲くそうなので、また、いろいろな発見をしに行きたいです。」



きららの森散策に参加

「藤原先生と一緒に秋の原生林を歩こう」に参加して 安城 草苺 吉秀

今年の植樹祭に出席することが出来なかったが、前日の段戸原生林の散策は、何が何でも参加したいと思っていた。

当日、藤原先生が女の人であったのでギョッと驚いた。そして先生の履いていた靴を見て45年ほど前、高校2年のとき、母にねだって大須の靴屋で作ってもらった登山靴、それを履いて南アルプスの1週間の縦走、蒜山での全国高等学校登山大会のことなど様々なことが思い出された。先生の靴はとても使い込まれ、歩きやすそうで手入れも十分ですばらしかった。樹木の説明も詳細かつ解りやすく、今まで植物に知識の無い私にも興味深かった。ほとんど覚えきれていないが「カエデなどは15～16cmの子供が出ているのにブナの林の下に実の残骸は見えるが新しい芽が出ていない。ブナの実は大変美味でリスなどが好んで食べる。まずくて鳥獣も食べないカシヤナラの実などを、蔑称でドングリというのであってブナはドングリではない」などの説明は、面白かった。数日後、部屋に飾ってある水越武さんの「秋のブナ林」の写真を見ながら以前講演を聞いたことのある東大の“どろ亀さん”(高橋信清先生)の“樹海に生きて”という本を押入れの奥から探し出して再読することにした。また、足助に出向き豊田森林組合の“矢作川流域の樹木100選”を手に入れてきた。

今まで何十年も無関心で過ごし、何の知識も無い樹木ではあるが、これからはその連鎖・影響に関心を持ち、少しでも名称・特性などを勉強したい。そして十年程前から始めた根っこ・流木の彫刻を続け、放っておけば薪ぐらいにしかない木に、ほんのちょっと手を入れることによって、そのぬくもりを感じ、その寿命を少し延ばして楽しませてもらうようにしたい。このような機会を作っていただいた「森を再生する会」・藤原先生に感謝・感謝！！

植樹祭を準備して 古地 温

この度の植樹祭に大勢の人々が参加し、植樹を楽しんでくれてとても満足です。

植樹祭は『お祭り』ですが、本来の目的は森を回復する事業ですから、参加することによって、森を回復するための仕事を理解し、山に慣れ親しんでくれることが、最も大事なことだと思います。特に将来を担ってくれる学生さんやボーイスカウトの子どもさんたちが参加してくれたことは、大変うれしいことです。

私は、段戸裏谷の反対側で育ち、子どもの時から山の仕事を手伝っていました。ですから、山の仕事にはよく慣れています。下準備には多くの仕事がありますが、中でも伐採した枝木の始末に労力がかかります。定例の活動日は月一度(第4週の日曜日)ですが、参加する人が少なく、これで準備が終わるのかと心配したこともありました。現在私は、会社を定年退職していますので、自由になる時間が増えましたが、何かと用事が入るものです。ですから、私は短い時間でも都合して、安城市の自宅から段戸山に一人で通いました。

私のやった仕事は、打ち落とした枝木の焼却です。火事に注意しながらボンボン燃やしました。延焼を防ぐ意味で、作業は風のない日、雨上がりの翌日などにしました。

この他、道を作ったり、荷物を作ったり、沢に池もつくって魚も30匹ほど入れました。魚は小さく、また、岩陰に隠れてしまうので、残念ですが、上からは見えませんでした。

昔から「かごに乗る人、担ぐ人、そのまた、わらじを作る人」という言葉が伝えられています。私はわらじを作る人かも知れませんが、この仕事に満足しています。皆、それなりの役割を果たすことが、森の回復につながると思います。2年前、健康診断で肺がんの症状があるとか、血管が詰まりかけているので将来は手術をする必要があると警告を受けていましたが、先日のMRI検診の結果は、「全く異常なし」と言われ霧が晴れる思いでした。これも森の恵みと感謝しています。

ちゃんこ鍋つくり 森下 芳樹

今回の私の仕事は「植樹祭」ならぬ「食事祭」でした。前日の夕食、当日の朝食をそれぞれ100人前と昼食のちゃんこ鍋250人前を作る担当でした。約10名がにわかシェフとなり取り組みました。すばらしいチームワークで無事終えることが出来たのも、すばらしい仲間のお陰と感謝しています。

普段から相撲少年たちのお世話をしている関係で「ちゃんこ鍋」とは深い縁があり、得意分野でもあります。今回は、鳥と猪にEM野菜たっぷりの健康志向の鍋としました。特に猪は斉藤さんが現地で捕獲し上手にさばいていただいた為、極上のうまみが出せたと思います。秋のさわやかさも手伝い、250人前のちゃんこ鍋もあっというまに空になり、参加者の食べっぷりに感服いたしました。





ホームページをご覧ください。

<http://www.katch.ne.jp/~kamiyaf18>

特定非営利活動法人・森を再生する会
森を再生する会

理事長 神谷輝幸
安城事務所：Tel:080-

事務局長 榊原和久
西尾事務所：

Tel:0563-54-1018

FAX:0563-54-1021

〒445-0865
西尾市本町30

理事 斎藤和彦
(段戸ふる里会会長)

Tel&Fax:0536-64-5470

所在地：北設楽郡設楽町
大字田峯字西川16

「一万人の森づくりをやろう」

坂田先生に誘われて度々、安城市に通ううちに『NPO森を再生する会』が生まれた。豊かだった三河の海は汚れ、魚が獲れない。川が痩せ、里山が荒れ、今ふる里は崩壊の危機にある。

世界中で夜昼なしに化石燃料を燃焼し、文明社会は大気中のCO₂の濃度を高め、地球温暖化が海面温度を上昇させ、蒸発する水はやがて台風や大雨と化し落下してくる。度かさなる米国のハリケーン襲来、ヨーロッパの洪水、越前クラゲの大発生となって地球に黄色い信号を灯す。CO₂を最も効率よく吸収できるのは樹木であり、森の再生こそが地球規模での急務である。

矢作川と豊川の分水嶺である段戸に、「こんにちは」と仲間たちが森づくりに登ってくる。伐採や枝葉の片付けの中に友情や絆が芽生え、今週の植林祭ではヘリを飛ばして頭上から炭を撒きながらみんなで苗木を植えた。

「バリ、バリ、バリ」頭上に響いた仲間たちがこの山を埋め尽くすその日まで、わたしは会の根っこを支え続けよう決心した。



ヘリコプターを見上げる斎藤和彦さん↑

原稿募集

次号テーマ 私の夢

平成18年2月末日原稿締め切り あなたの夢を語ってください。

環境財団助成金ニュース

次年度の助成金が決まりました！！

イオン助成名：イオン環境財団2005年度(第15回)助成 ご参加ください！！。

事業期間：2006. 4. 1～2007. 3. 31

。基本テーマ：「自然の生態系を守るために」

活動内容：設楽町斎藤和彦氏所有の手入れされていないスギ・ヒノキの人工林を除去、間伐し広葉樹を植え、潜在自然植生を生かした生態系豊かな水源の森をつくる。

定例活動日：毎月第四日曜日10:00～15:00。植樹：春、秋の2回を予定

よろしく願いいたします。小谷野が会報の編集をお手伝いしています。

心優しく、また、力あふれ、そして、森の大好きな皆さんとご一緒できて、大変うれしいです。必ず、日本の緑はよみがえり、そして地球温暖化も防止できると確信しています。私自身も生命のよみがえりを感じます。皆様の声をどうぞ寄せてください。会報が私たちの交流の場になりますように。

E-Mail: kinko@luck.ocn.ne.jp Tel&Fax: 043-275-0877

〒262-0877 千葉市花見川区検見川町2-207-13

編集委員会 小谷野錦子



